

隅田川沿岸の歴史的変遷の変化

千葉工業大学 学生員 ○三澤 智憲

千葉工業大学 正会員 篠田 裕

1. 研究背景

地球上の水循環の経路として重要な役割を果たし、そして、現在に至るまで人々の生活や憩いの場となってきた川。日本の代表河川である隅田川を例にとると、花火大会、屋形船などの行事、また、江戸時代以降多くの文学作品に隅田川が登場し、人々の生活と共にあったことがわかる。

しかし、現在は改善されつつあるが、戦争による殖産興業がもたらした水汚染、昭和30年代後半の高度経済成長による工場排水や、生活排水のたれ流しによる水質悪化、また、地下水汲み上げによる江東デルタ地帯の地盤沈下、高潮災害対策のための鉛直護岸の建設、そして、首都高速道路の建設により、隅田川は親水性を失った。

2. 目的

このように時代とともに変化している川において、隅田川を例にとり、沿岸・堤防を中心として、過去から現代に至るまでにどのような変化を遂げてきたかを明らかにし、隅田川の未来のあるべき姿を求めることを目的とする。

3. 研究概要

3.1 研究方法

比較対象とする時代は、江戸後期、昭和前期、現代とする。江戸時代については、鶴岡蘆水と葛飾北斎による「隅田川兩岸一覽」、昭和時代では藤牧義夫による「隅田川絵巻」、現代では現地調査を基に比較する。

3.2 研究手順

- 1) 時代毎に沿岸の特徴を示す資料を集める。
- 2) それぞれの時代の沿岸の特徴を分析・比較する。
- 3) 現代に足りない要素から計画の提案をする。

4. 水害の記録

4.1 江戸時代の水害の記録

江戸時代は、隅田川の洪水制御への取組みにもかかわらず、たびかさなる洪水に悩まされ続けた。

古くは、慶長元年(1596)6月の大雨により、浅草あたりで溺死者の記録があり、元和3(1617)年4月の大風雨で入間川が増水し千住大橋が損害を受け、同5年8月にも洪水のため民家の流出が多く、餓死者が町にあふれた。万治2(1657)年7月の大雨では、浅草の幕府米蔵が浸水したとの記録がる。

4.2 明治時代の水害の記録

明治時代は、荒川放水路の開削により洪水流量を分散し対処した。しかし、江戸時代と同様、深刻な洪水の被害を受け続けた。

4.3 昭和時代の水害の記録

戦後昭和20年代は大規模な台風が毎年のように来襲し、主として隅田川以東の東部低地域において、大規模な水害が発生した。

昭和30年代になると、区部西部の開発が急速に進んだ結果、東部低地帯に加え、神田川流域など区部西部でも、大きな浸水被害が発生するようになりました。

昭和40、50年代になると、東部低地域における高潮災害は隅田川などの外郭堤防の概成等により大きく減少した。

5. 名所江戸百景

広重最晩年の作品であり、その死の直前まで制作が続けられた。

1854年の大地震からの災害からの復興を祈念した世直しの意図もあった点が指摘されている。



図-1 1856年の両国橋(広重)

6. 隅田川両岸一覧概要

6.1 鶴岡蘆水による隅田川両岸一覧

1781年の隅田川を描いた作品である。乾坤の二巻からなり、乾では、隅田川の東岸を永代橋から千住大橋までを描き、坤では、西岸上流として真崎稻荷社より高輪海岸までを描いている。



図-2 1781年の両国橋(蘆水)

6.2 葛飾北斎による隅田川両岸一覧

1806年の隅田川を描いている。絵本三冊本の冊子仕立てになっており、隅田川の両岸沿い東岸を望むように遡上し、吉原で終わっている。



図-3 1806年の両国橋(北斎)

7. 隅田川絵巻概要

昭和初期のモダン都市東京を描いていた版画家藤牧義夫の作品であり、1934年(昭和9)の隅田川を描いている。



図-4 1934年の永代橋(藤牧)

8. 江戸・昭和・現代における沿岸の特徴

8.1 江戸時代

広重の江戸百景、蘆水と北斎の両岸図から自然堤防と石積みによる人工的に造られた堤防、また川に対して杭または階段があるところが確認できる。そしてどの場面をみても、水面と生活の場が近い様子が読みとれる。

8.2 昭和時代

隅田川絵巻からは、コンクリートまたは石のブロックによる堤防が目立つ。そして、建物が少ないという理由でもあるが、隅田川から少し距離をおいて描かれている場面においても、水面が見えることから、水面と陸の近いことがわかる。

8.3 現代

現在は、昭和50年までに完成した鉛直護岸やその前面にテラス整備を施してある堤防、また、緩傾斜堤防や高規格堤防(スーパー堤防)となっている。

鉛直護岸(カミソリ堤防)の堤内地側から隅田川を望むことはできない。テラス整備がされているところは、鉛直護岸から階段を下りていくことでテラスにアクセス出来、耐震性と親水性を考慮した設計になっている。緩傾斜堤防・高規格堤防では、川面側が緩傾斜になっており、そこからテラスまで降りることができ、耐震性、親水性を考慮した設計になっている。これら全ての形状の堤防形式は、洪水時の水面上昇を見込んだ堤防高となっており、治水能力が高いということである。

9. まとめ

蘆水や北斎の両岸図から判読される沿岸の特徴と、藤巻義夫による隅田川絵巻による沿岸の特徴、そして現代の沿岸への変遷を概観した。利根川東遷や荒川放水路の建設、江戸時代から昭和時代にかけては流路による治水対策、昭和時代から現代にかけては沿岸形成による治水対策が中心であったと考えられる。その結果としてカミソリ堤防が果たす、治水に問題の少ない現代に求められているものは、親水性となってきた。現在は、カミソリ堤防の改変という河川事業により親水性を取り戻しつつあるといえる。

蘆水や北斎の両岸図にあった堤内地と低い水面で連続した親水性を作り出すこと、堤外地内のどの場所においても水面にアクセスすることが出来ること、昔のよき時代を擬似的に再現し、親水性を高められる方法なのかも知れない。

10. 参考文献

- 1) 菊池山哉:五百年前の東京、東京史談会(1956)
- 2) 宮尾しげを:名所江戸百景・広重画、集英社(1922)
- 3) 遊佐喜美男:隅田川両岸一覧之図、下町タイムス社(1991)
- 4) 隅田川文庫編集委員会:隅田川絵図、隅田川文庫(1987)
- 5) 東京建設局:隅田川流域河川整備計画、www.kensetsu.metro.tokyo.jp (2011)
- 6) 永田生慧:ボストン美術館浮世絵名品展、日本経済新聞社(1998)